

I 男女の地位の平等

1 男女平等についての現在の状況（問1 25ページ）

男女の地位が「平等である」分野は、男女とも「学校教育の場」と考える人が最も多い

全体では「平等である」が、“(d)学校教育の場では”（43.1%）、“(a)家庭の中では”（33.2%）、“(b)職場の中では”（25.7%）、“(c)地域活動の中では”（24.4%）の順に多くなっている。「平等である」が最も少ないのは“(e)政治の場では”（7.9%）である。

女性では、“(g)社会全体では”（6.1%）、“(e)政治の場では”（3.2%）で、「平等である」が1割未満になっており、また、すべての項目で男性よりも「平等である」が少なくなっている。

男性では、“(g)社会全体では”（17.5%）、“(e)政治の場では”（14.4%）が1割台となっているが、すべての項目で女性よりも、「平等である」が多くなっている。特に差が大きいのは、“(f)法律や制度の上では”（33.8%）で、男性が女性を19.1ポイント上回っている。

II 家庭生活等

1 「男は仕事、女は家庭」という考え方（問2 37ページ）

男女とも反対派が上回る。女性では男性よりも反対派が上回る

全体では、「賛成」（2.4%）、「やや賛成」（11.3%）を合わせて『賛成である（計）』は13.7%となっている。一方、「あまり賛成しない」（25.0%）、「賛成しない」（29.9%）を合わせた『賛成しない（計）』は54.9%となり、『賛成しない（計）』が『賛成である（計）』を41.2ポイント上回っている。「どちらともいえない」は28.0%となっている。

女性では、『賛成である（計）』は9.6%、『賛成しない（計）』は58.5%となり、『賛成しない（計）』が『賛成である（計）』を48.9ポイント上回った。

男性では、『賛成である（計）』は19.2%、『賛成しない（計）』は50.7%となり、『賛成しない（計）』が『賛成である（計）』を31.5ポイント上回っている。

2 「男は仕事、女は家庭」という考え方に賛成する理由（問2-1 40ページ）

「家事・育児・介護と両立しながら、女性（妻）が働き続けることは大変」で男女に差

「家事・育児・介護と両立しながら、女性（妻）が働き続けることは大変だから」では、男性（40.4%）より女性（71.7%）の方が31.3ポイント多くなっている。

3 「男は仕事、女は家庭」という考え方に反対する理由（問2-2 41ページ）

「固定的な男性（夫）と女性（妻）の役割分担の意識を押しつけるべきではないから」が最多

「固定的な男性（夫）と女性（妻）の役割分担の意識を押しつけるべきではないから」が女性（77.6%）、男性（59.1%）とともに最も多く、女性の方が18.5ポイント多くなっており、男女の差としても最も大きい。

また次に男女の差が大きいのは、「男性（夫）も女性（妻）も働いた方が、多くの収入を得られるから」で、女性（38.0%）、男性（47.7%）と男性の方が9.7ポイント多くなっている。

4 男性が家事・育児を行うことのイメージ（問3 42ページ）

男女の差が大きいものとして、「子どもに良い影響を与える」は女性が20.7ポイント上回る

全体では、「男性も家事・育児を行うことは、当然である」(65.5%)が最も多く、次いで「子どもに良い影響を与える」(56.4%)が続いている。他は半数を下回っている。

男女とも「男性も家事・育児を行うことは、当然である」(女性69.9%、男性60.3%)が最も多く、次いで「子どもに良い影響を与える」(女性65.3%、男性44.6%)が続いている。

男女の差が大きいものとしては、「子どもに良い影響を与える」(20.7ポイント差)、「家事・育児を行う男性は、時間の使い方が効率的で、仕事もできる」(10.0ポイント差)が女性のポイントが高い一方で、「家事・育児は、男性よりも女性の方が向いている」(10.7ポイント差)は男性のポイントが高くなっている。

5 男性が家事、子育て、介護、地域活動に参加するために必要なこと（問4 44ページ）

全体では、「育児・介護のための休暇を取得しやすい職場環境が整備されること」が最多

全体では、「育児・介護のための休暇を取得しやすい職場環境が整備されること」(63.2%)が最も多く、次いで、「夫婦や家族間で家事・育児などの分担について、十分に話し合うこと」(59.7%)、「男性が家事・育児などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」(57.5%)が続いている。

男女の差は「年配者やまわりの人が、夫婦の役割分担などについての当事者の考え方を尊重すること」が最も大きく、女性の方が20.8ポイント多くなっている。

6 親の介護における役割分担

(a) 自分の親の介護（問5(a) 46ページ）

女性は「自分の方が配偶者より多く分担」、男性は「配偶者と半分ずつ分担」が最多

全体では、「外部サービスを利用しながら、自分の方が配偶者より多く分担」(37.1%)が最も多くなっている。

「外部サービスを利用しながら、自分の方が配偶者より多く分担」(女性44.0%、男性27.8%)が女性で最も多く、「外部サービスを利用しながら、自分と配偶者で半分ずつ分担」(女性19.7%、男性36.4%)が男性で最も多い。

(b) 配偶者の親の介護（問5(b) 48ページ）

女性は「配偶者と半分ずつ分担」、男性は「配偶者の方が自分より多く分担」が最多

全体では、「外部サービスを利用しながら、自分と配偶者で半分ずつ分担」(33.4%)が最も多くなっている。

「外部サービスを利用しながら、自分と配偶者で半分ずつ分担」(女性36.3%、男性29.7%)が女性で最も多く、「外部サービスを利用しながら、配偶者の方が自分より多く分担」(女性24.5%、男性30.2%)が男性で最も多い。

Ⅲ 職業

1 職場での男女平等について（問6 50ページ）

男女ともに「平等である」は「教育や研修制度」で最も多く、「昇進・昇格」で最も少ない

男女とも「平等である」と回答した人が最も多いのは、“（d）教育や研修制度は”（女性58.1%、男性60.3%）となっている。

一方、最も少ないのは、女性では“（b）昇進・昇格は”（34.6%）、男性では“（b）昇進・昇格は”と“（f）仕事の内容は”（ともに39.1%）となっている。

『男性が優遇されている』については、男女とも“（b）昇進・昇格は”（女性36.1%、男性33.6%）が最も多い。『女性が優遇されている』については、男女とも“（f）仕事の内容は”（女性9.9%、男性15.5%）が最も多い。

2 女性が管理職に昇進することについて（問7 52ページ）

男女ともに賛成派が7割を超えている

男女とも『賛成である（計）』（女性84.4%、男性73.3%）が『賛成しない（計）』（女性2.3%、男性3.9%）を上回っている。

『賛成である（計）』は女性の方が男性より11.1ポイント多く、『賛成しない（計）』は男性の方が女性より1.6ポイント多くなっている。

3 管理職・議員等への就任・立候補を打診された場合の意欲

自治会長・町内会長、議員や首長を打診された際は「断る」が男女とも最も多い

（a）職場の管理職や役員（問8 53ページ）

女性では「断る」（39.4%）が最も多く、男性では「依頼されたら受ける」（52.1%）が最も多い。

（b）自治会長、町内会長（問8 54ページ）

男女とも「断る」（女性69.9%、男性53.0%）が最も多い。

（c）議員や自治体の首長（問8 55ページ）

男女とも「断る」（女性79.3%、男性65.2%）が最も多い。

4 打診を断る理由

いずれのケースも「責任が重いから」が断る理由の最多を占めている

（a）職場の管理職や役員（問8-1 56ページ）

全体では、「責任が重いから」（47.5%）が最も多く、次いで、「知識や能力の面で不安があるから」（38.7%）、「人間関係がわずらわしいから」（21.8%）が続いている。

男女の差は「人間関係がわずらわしいから」が最も大きく、男性の方が22.2ポイント多くなっている。

(b) 自治会長、町内会長（問8-1 58ページ）

全体では、「責任が重いから」（38.8%）が最も多く、次いで、「時間的な余裕がないから」（35.5%）、「知識や能力の面で不安があるから」（33.8%）が続いている。

男女の差は「人間関係がわずらわしいから」が最も大きく、男性の方が14.0ポイント多くなっている。

(c) 議員や自治体の首長（問8-1 60ページ）

全体では、「責任が重いから」（43.9%）が最も多く、次いで、「知識や能力の面で不安があるから」（39.8%）「時間的な余裕がないから」（27.8%）が続いている。

男女の差は「人間関係がわずらわしいから」が最も大きく、男性の方が10.2ポイント多くなっている。

5 女性のリーダーを増やす上での障害（問9 62ページ）

男女とも「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」が最多

男女とも「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」（女性 62.4%、男性43.0%）が最も多くなっている。

男女差では、「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」（19.4ポイント差）で女性が男性のポイントを大きく上回っており、「現時点では、必要な知識や経験などを持つ女性が少ないこと」（5.2ポイント差）で男性が女性のポイントを上回っている。

6 女性が働き続ける上での障害（問10 64ページ）

男女とも「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」が最多

男女とも「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」（女性 71.5%、男性57.5%）が最も多く、次いで、男性は「結婚や出産の際、退職しなければならない慣行が今でも残っていること」（37.5%）、女性は「給与、昇進・昇格の機会が男女間格差があること」（34.4%）の順となっている。

男女の差が大きいものとして、「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」（14.0ポイント差）で女性が男性のポイントを上回っており、「結婚や出産の際、退職しなければならない慣行が今でも残っていること」（6.5ポイント差）で男性が女性のポイントを上回っている。

7 女性の再就職に必要なこと（問11 66ページ）

男女とも「保育・介護サービスの充実」と「家事・育児・介護など家庭内の相互の協力」が上位

男女とも「保育・介護サービスの充実(施設の充実、時間の延長など)」（女性70.4%、男性63.8%）と「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力」（女性69.0%、男性59.3%）の2項目が多くなっている。

「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力」（9.7ポイント差）、「再就職のための自己啓発セミナーや技術、技能の習得機会の充実」（7.7ポイント差）は女性が男性を上回り、男性の方が女性を大きく上回る項目は見られない。

8 男女が共に仕事と家庭を両立していくために必要なこと（問12 68ページ）

男女とも「育児・介護休業制度を利用しやすい職場環境づくり」が最多

男女とも、「育児休業・介護休業制度を利用しやすい職場環境づくり」（女性67.5%、男性56.0%）が最も高くなっている。次いで「労働時間の短縮や休暇制度の充実」（女性57.6%、男性51.5%）、「保育・介護サービスの充実」（女性43.4%、男性35.3%）となっている。

上位3項目とも、女性が男性を5ポイント以上上回っている。

IV 女性の社会参画

1 女性のリーダーが増えるとどのような影響があると思うか（問13 70ページ）

男女とも「男女問わず優秀な人材が活躍できるようになる」が最多

全体では、男女ともに、「男女問わず優秀な人材が活躍できるようになる」（女性69.6%、男性65.7%）が最も多く、次いで、女性では「女性が持つ意見や発想が反映される」（63.7%）、男性では「多様な視点が加わることで、新たな価値や商品・サービスが創造される」（58.6%）の順となった。

男女の差が大きいものとして、「男女問わず仕事と家庭の両方を優先しやすい社会になる」では女性（44.5%）が男性（33.0%）を11.5ポイント上回っている。

2 女性が方針決定の場に参画するために必要なこと（問14 72ページ）

女性では「活動時間帯の工夫」、男性では「性別による役割分担意識を改めること」が最多

女性では、「さまざまな立場の人が参加しやすいよう活動時間帯を工夫すること」（57.1%）が最も多く、次いで「地域活動のリーダーは男性が務めるという性別による役割分担意識を改めること」（37.8%）となっている。

男性では、「地域活動のリーダーは男性が務めるという性別による役割分担意識を改めること」（53.0%）が最も多く、次いで「さまざまな立場の人が参加しやすいよう活動時間帯を工夫すること」（44.6%）となっている。

3 性別に配慮した防災・災害対応・復興対策のために必要なこと（問15 74ページ）

男女とも「性別に配慮した避難所運営を行う」が最多

男女とも「更衣室やプライバシーの確保など、性別に配慮した避難所運営を行う」（女性63.0%、男性51.3%）が最も多く、次いで、「避難所の設置・運営について、物事を決める際には男女を交えた話し合いをする」（女性58.4%、男性48.9%）となっている。

V ドメスティック・バイオレンス（DV）等

1 配偶者や交際相手などからの暴力と認識される行為（問16 76ページ）

「性的行為の強要」が9割を超える

「暴力にあたる」と思うと答えた人を多い順に見ていくと、
“(k)嫌がっているのに、性的な行為を強要する”(全体93.6%)
“(i)「誰のおかげで生活できるんだ」や「甲斐性なし」などと言う”(〃 84.3%)
“(l)避妊に協力しない”(〃 83.7%)
“(j)家計に必要な生活費を渡さない”(〃 82.2%)
“(g)職場に行くことを妨害したり、外出先を制限する”(〃 81.2%)
“(a)なぐるふりをしておどす”(〃 73.6%)
“(h)何を言っても長期間無視し続ける”(〃 73.3%)
“(e)家族や友人との関わりを持たせない”(〃 71.0%)
“(f)交友関係や行き先、電話・メールなどを細かく監視する”(〃 68.1%)
“(b)大声でどなる”(〃 67.9%)
“(c)馬鹿にしたり、見下したような言動をする”(〃 66.6%)
“(d)他の異性や親しい人との会話を許さない”(〃 55.5%)
の順となった。

2 配偶者からの被害経験の有無（問17 78ページ）

男女とも「身体的暴行」と「心理的攻撃」で割合が高い

“(a) 身体的暴行”では、「何度もあった」（女性5.7%、男性2.4%）、「1、2度あった」（女性18.2%、男性15.3%）となり、その合計では女性が男性を6.2ポイント上回った。
“(b) 心理的攻撃”では、「何度もあった」（女性10.2%、男性5.8%）、「1、2度あった」（女性12.9%、男性18.8%）となり、その合計では大きな差は見られない。
“(c) 経済的圧迫”では、「何度もあった」（女性5.7%、男性0.8%）、「1、2度あった」（女性6.1%、男性2.9%）となり、その合計では女性が男性を8.1ポイント上回った。
“(d) 性的強要”では、「何度もあった」（女性4.5%、男性0.8%）、「1、2度あった」（女性12.2%、男性3.4%）で、その合計では女性が男性を12.5ポイント上回った。

3 配偶者からの暴力についての相談経験の有無・相談先（問17-1 86ページ）

「どこ（だれ）にも相談しなかった」は、女性48.0%、男性63.8%

配偶者から被害を受けたことが「これまでにあった」と答えた人に、どこ（だれ）かに打ち明けたり、相談したことがあるかをたずねたところ、「相談した」と答えた人は36.9%、「相談しなかった」は53.6%で、「相談しなかった」方が16.7ポイント多かった。
性別で見ると、「相談しなかった」は男性（63.8%）が女性（48.0%）より15.8ポイント多くなっている。

相談した人のうち、どこ（だれ）に相談したかを見ると、女性では「家族や親戚」（28.5%）、次いで「知人、友人」（24.5%）の順で、その他は3%未満となっている。男性では「家族や親戚」（12.1%）、次いで「知人、友人」（10.3%）の順で、その他は4%未満となっている。

4 配偶者からの暴力について相談しなかった理由（問17-2 91ページ）

男女ともに「相談するほどのことではないと思ったから」が最多

配偶者から被害を受けながら「相談しなかった」と答えた人に、その理由をたずねたところ、男女ともに最も多かったのが「相談するほどのことではないと思ったから」（女性47.9%、男性68.9%）であった。

次いで、女性では「自分さえ我慢すれば、このままやっていけると思ったから」（34.4%）「相談してもむだだと思ったから」（30.2%）、「自分にも悪いところがあると思ったから」（24.0%）と続く。

男性では「自分にも悪いところがあると思ったから」（36.5%）、「自分さえがまんすれば、このままやっていけると思ったから」（24.3%）、「別れるつもりがなかったから」（24.3%）と続く。

男女の違いで特徴的なのは、「相談してもむだだと思ったから」では女性の方が16.7ポイント多くなっている。「相談するほどのことではないと思ったから」では男性の方が21.0ポイント多くなっている。

5 交際相手からの被害経験の有無（問18 92ページ）

男女とも「心理的攻撃」で最も比率が高い

“（a）身体的暴行”は「10歳代にあった」が2.6%、「20歳代にあった」が3.4%、「30歳代以上にあった」が0.8%となっている。

“（b）心理的攻撃”は「10歳代にあった」が4.3%、「20歳代にあった」が7.0%、「30歳代以上にあった」が2.6%となっている。

“（c）経済的圧迫”は「10歳代にあった」が1.2%、「20歳代にあった」が2.8%、「30歳代以上にあった」が1.5%となっている。

“（d）性的強要”は「10歳代にあった」が2.7%、「20歳代にあった」が4.7%、「30歳代以上にあった」が0.9%となっている。

6 交際相手からの暴力についての相談経験の有無・相談先（問18-1 102ページ）

「どこ（だれ）にも相談しなかった」は、女性52.1%、男性72.1%

交際相手から被害を受けたことが「これまでにあった」と答えた人に、どこ（だれ）かに打ち明けたり、相談したことがあるかをたずねたところ、「相談した」と答えた人は39.8%、「相談しなかった」は58.0%で、「相談しなかった」方が18.2ポイント多かった。

性別で見ると、「相談しなかった」は男性（72.1%）が女性（52.1%）より20.0ポイント多くなっている。

相談した人のうち、どこ（だれ）に相談したかを見ると、女性では「友人、知人」（35.1%）、次いで、「家族や親戚」（11.7%）、「職場・アルバイトの関係者」（4.3%）の順で、それ以外は4%未満となっている。

男性では「友人、知人」（18.6%）、次いで、「家族や親戚」（7.0%）の順で、それ以外は3%未満となっている。

7 交際相手からの暴力について相談しなかった理由（問18-2 106ページ）

男女とも「相談するほどのことではない」が最多

交際相手から被害を受けながら「相談しなかった」と答えた人に、その理由をたずねたところ、男女とも最も多かったのは「相談するほどのことではないと思ったから」（女性40.8%、男性58.1%）であった。

女性では、次いで「恥ずかしくて誰にも言えなかったから」（26.5%）、「相談してもむだだと思ったから」（24.5%）が続く。男性では、次いで「自分にも悪いところがあると思ったから」（29.0%）、「相談してもむだだと思ったから」（25.8%）が続く。

女性の方が男性より多くなったのは、「恥ずかしくて誰にも言えなかったから」、「どこ（だれ）に相談してよいのかわからなかったから」、「他人を巻き込みたくなかったから」、「自分が受けている行為がDVとは認識していなかったから」などがある。男性の方が女性より多くなったのは、「相談するほどのことではないと思ったから」、「自分にも悪いところがあると思ったから」などであった。

8 性暴力被害に関するイメージ（問19 107ページ）

女性では「被害にあうのはたいてい暗い夜道やひと気の少ない場所である」が最多

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計が多かったのは、女性では、

- “（c）被害にあうのはたいてい暗い夜道やひと気の少ない場所である”（52.0%）
- “（a）性暴力にあうのは、若い女性である”（50.1%）
- “（g）性暴力は、加害者の性欲が強すぎて、コントロールできずに起こっている”（41.6%）

男性では、

- “（g）性暴力は、加害者の性欲が強すぎて、コントロールできずに起こっている”（53.9%）
- “（a）性暴力にあうのは、若い女性である”（52.6%）
- “（c）被害にあうのはたいてい暗い夜道やひと気の少ない場所である”（51.0%）

男女とも「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の合計が最も多かったのは、

- “（d）本気で抵抗すれば被害は防げる”（女性75.9%、男性66.2%）であった。

男女で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計の差が大きいものとしては、

- “（g）性暴力は、加害者の性欲が強すぎて、コントロールできずに起こっている”（12.3ポイント差）と“（d）本気で抵抗すれば被害は防げる”（9.3ポイント差）であり、ともに男性が上回っている。

9 相談機関・関係者の周知状況（問20 109ページ）

男女とも最も多かったのは「警察」

男女とも最も多かったのは「警察」（女性80.3%、男性83.6%）であった。

次いで、女性では「石川県女性相談支援センター（配偶者暴力相談支援センター）」（23.5%）、「市役所、町役場に設置されている女性相談支援室など」（17.6%）の順となった。

男性では「法テラス（日本司法支援センター）、弁護士会」（17.0%）、「市役所、町役場に設置されている女性相談支援室など」（15.7%）の順となった。

10 DVや性暴力等の暴力を防止するために必要なこと（問21 111ページ）

男女とも「被害者が早期に相談できるよう、相談窓口や保護施設を充実させる」が最多

全体では、「被害者が早期に相談できるよう、相談窓口や保護施設を充実させる」（女性 70.6%、男性66.2%、全体68.3%）が最も多く、次いで「学校または大学で、児童・生徒・学生に対し、暴力の被害者にも加害者にもならないよう教育を行う」（女性60.6%、男性60.1%、全体60.4%）、「加害者への罰則を強化する」（女性57.1%、男性58.8%、全体57.8%）の順となった。

男女の差が大きいものは、「暴力を振るったことのある者に対し、繰り返さないための教育を行う」（6.6ポイント差）と「暴力を助長するおそれのある情報（雑誌、インターネットなど）を取り締まる」（6.2ポイント差）で、どちらも女性のポイントが多くなっている。

VI 男女共同参画社会の実現について

1 用語の周知度（問22 113ページ）

全体では「DV」で9割超、「男女雇用機会均等法」「マタニティ・ハラスメント」「ジェンダー」「性的少数者」で8割を超える

全体で周知度が高い順に、

- “（k）DV（配偶者や交際相手からの暴力）”（93.6%）
 - “（h）男女雇用機会均等法”（88.2%）
 - “（m）マタニティ・ハラスメント”（87.5%）
 - “（f）ジェンダー（社会的・文化的につくられた性別）”（86.3%）
 - “（n）性的少数者（LGBTなど）”（81.3%）
 - “（a）男女共同参画社会”（75.8%）
 - “（j）仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）”（66.2%）
- 上記用語で、周知度が6割を超えている。

2 性別による無意識の思い込み（問23 116ページ）

男女とも「女性には女性らしい感性があるものだ」が最多

- 「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計が多かったのは、男女とも同様に、
- “（k）女性には女性らしい感性があるものだ”（女性73.5%、男性81.2%）
 - “（a）男性は仕事をして家計を支えるべきだ”（女性70.7%、男性76.0%）

男女とも「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の合計が最も多かったのは、“（j）同程度の実力なら、まず男性から昇進させたり管理職に登用するものだ”（女性88.6%、男性83.2%）であった。

男女で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計の差が大きいものとしては、“（c）自治会や町内会の重要な役職は男性が担うべきだ”（13.7ポイント差）は女性が、“（d）デートや食事のお金は男性が負担すべきだ”（23.8ポイント差）と“（g）男性は人前で泣くべきではない”（17.6ポイント差）は男性が上回っている。

3 男女共同参画社会の実現のために行政に対して望むこと（問24 120ページ）

男女とも「保育の施設・サービスや、高齢者・病人の施設、介護サービスを充実する」が最多

全体では「保育の施設・サービスや、高齢者・病人の施設、介護サービスを充実する」（52.0%）が最も多く、次いで「条例や制度の面で見直しを行い、性別による差別につながるものを改める」（39.6%）が続いている。

女性で最も多かったのは「保育の施設・サービスや、高齢者・病人の施設、介護サービスを充実する」（57.3%）、次いで「労働時間の短縮や在宅勤務の普及など、男女共に働き方の見直しを進める」（44.6%）となっている。

男性では「保育の施設・サービスや、高齢者・病人の施設、介護サービスを充実する」（45.3%）が最も多く、次いで「条例や制度の面で見直しを行い、性別による差別につながるものを改める」（42.5%）となっている。

男女の差があるものとしては、「労働時間の短縮や在宅勤務の普及など、男女共に働き方の見直しを進める」（15.3ポイント差）、「保育の施設・サービスや、高齢者・病人の施設、介護サービスを充実する」（12.0ポイント差）で女性が多くなっている。